

文豪先生

bungousensei

第八話

中川善史

絵・かないてつお



その日、文豪先生と民子は、ろんろんの運転するハム車に揺られて幸太君の父でからくり師の杉本源太夫の家へ向かっていました。

(解説・・・ハム車とは、ろんろんが飼っているハムスターのハムーが巨大化して車を引っ張るといいうステキな乗り物である。暴走モードとのんびりモードの二段変速が可能。その中間は不可)

民子が調べてきたことを話しています。

「なんでも、幸太君のお父さんは十一代目で、代々『源太夫』の名前を襲名することになっているそうです」

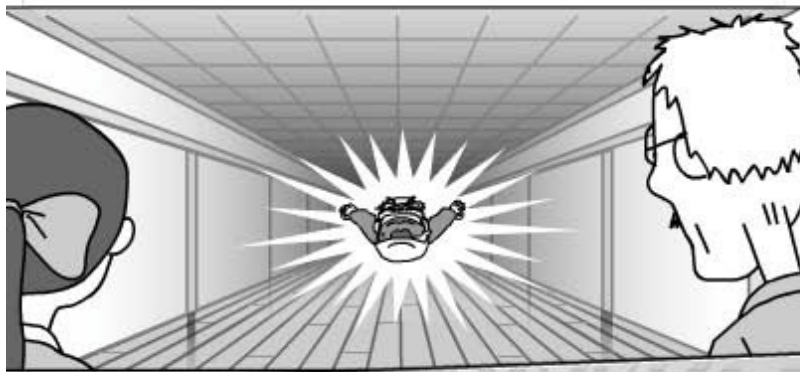
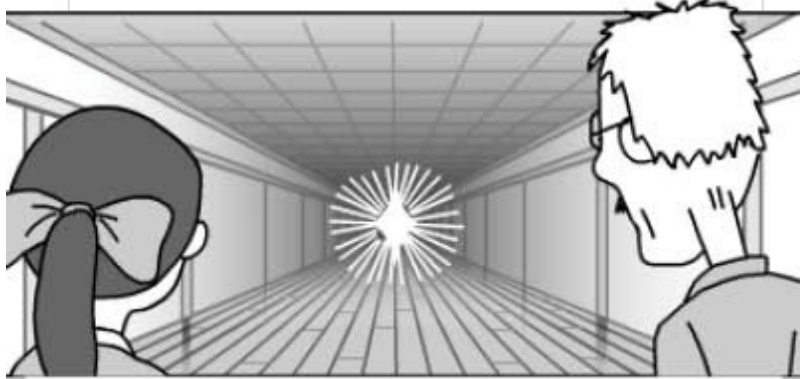
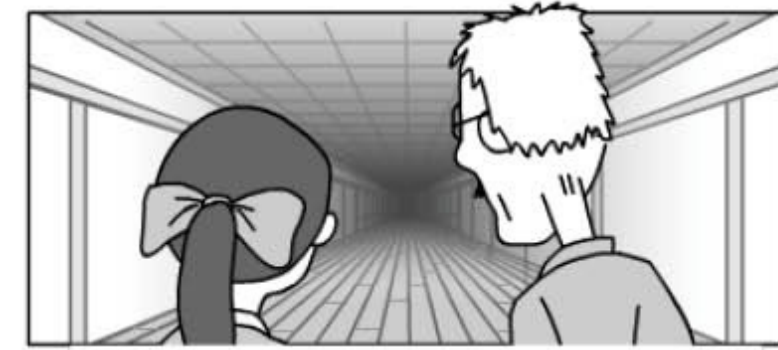
「由緒あるからくり師の家柄なんだな。幸太君も将来は名を継ぐかも知れないわけだ」

「なにか、伝統の重みを感じますね」

「うーん、どんな人が出て来るのか・・・緊張してきたな」

山の方に少し登ったところに広大な日本家屋が建っていました。あたりは森閑としています。木々の気が身体にしみいつて思わず背筋が伸びるようです。





広い玄関の戸は開いていました。正面に磨き上げられた廊下がずっと奥まで続いています。いや、ずっとずっととずっとと……一番奥はぼんやり霞んでいるくらい長い廊下です。じつと見ていると目玉が吸い込まれそうです。「ごめんください。研究所からまいりました」と、民子が声を駆けると、一呼吸おいて、「おー」と、廊下の奥の方から精霊のあくびのようにも聞こえる返事がありました。先生と民子が顔を見合っていると、廊下の一番奥に何か黒い点のようなのが見えて、それがぐんぐん迫ってくるようです。男がこっちに頭を向けて身体を水平にして、弾丸のように

飛んでくるのでした。

「おーーーーー」

先生と民子が慌ててよけると、男はそのまま玄関を飛び出て庭木に頭をぶつけて、地面の上で気絶しました。



（インターミッション・・・男が気絶しておりますので、しばらく、そのままでお待ちください）

男は息を吹き返すと、二人を家の中に案内しながら、

「いやー、すまねえ、すまねえ。いま、からくりで人間ロケットの試作品を作っているもんだからよ。おう、俺が十一代目・杉本源太夫だ。よろしく頼まあ」

「人間ロケット・・・？」

「なんだか、伝統だの由緒だのというイメージが崩れてきますね」

泉水のある庭に面した座敷に通されました。池には三羽のあひるが泳いでいます。床の間にはあひるの絵の掛け軸が掛かって、その前には刀掛があつて日本刀が飾つてあります。

源太夫は、職人らしく紺の作務衣を着ていますが、眉毛も目尻も下がっていて、黙つていても浮かれているような顔の男でした。

「なにを鳩が豆鉄砲を食つたような顔をしてやがんだい。黙つてちゃしようがねえ。お通夜じゃねえや。ほれほれ、陽気に陽気に、あらえっさっさあ、とくら」

男がぼんと手をたたくと、あたりの襖がみなスピーカーになつていようで、
♪踊りおどるなくら ちよいと東京音頭

東京音頭が大音響で鳴り響き、男は踊り始めました。民子は、名刺を差し出しながら、
「わたし、村立文化財保護調査研究所の・・・」

「なんだって、聞こえねえよ」

「そんりつー、ぶんかざいー、ほごー、けんきゆうしよのー」

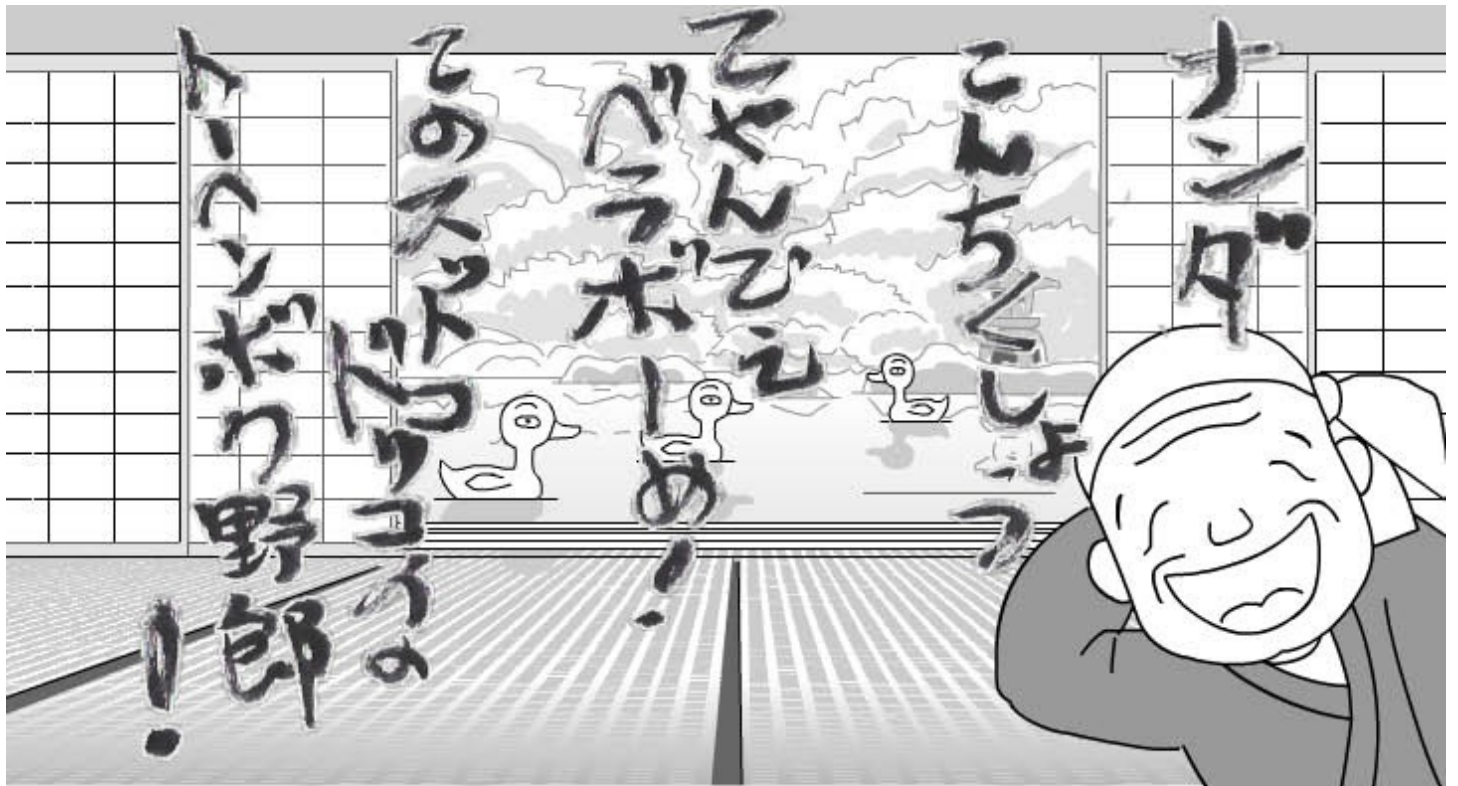
「こんな音楽が鳴っているんだーら、聞こえねえってんだよ」

「なんですって？ 聞こえないんですけど」

「なに口をぱくぱく開けているんだよ、わかんねえよ」

「この音楽何とかしてくださいよ！」

「え？ なんだって？」



その時、ろんろんがぼんと手を打ちました。ぱたつと、音楽が鳴りやみ、「わけがわかねえんぞ、このアマア！」「耳が割れそうだったのよ、このじじい！」という二人ののしりあいの声がしばらく残りしました。

「ふたりとも、みつともないぞ」

冷静なるろんろんの言葉に気を取り直して、にやけ顔に戻った源太夫が、

「まあ、長つたらしい挨拶は抜きにしようや。電話で聞いてら。お前さんは、研究所のねえちゃん。んで、こつちが・・・」

「私は作家で山田文豪・・・」
「ぶぶぶ」

と、源太夫は吹き出しました。

「あー、あんたかい。せがれに聞いたよ。物書きの癖に小学生の漢字のテストで零点取ったんだって？それも、二回も。笑つちまうよなあ。ははははは。それで、小説書いてんの？みんなひらがなで書いていんの？ははは。さぞ読みにくかろうや。ははははは。あはははははは」

文豪先生は、テストの件はゆゆしき事態に発展していると思いました。

今度は民子が聞きました。

「あのう、源太夫さんの話し方は、江戸っ子みたいに聞こえるんですが、そうなんですか？」
その途端、源太夫、顔色が変わり、下がっていた目と眉がきりきりと恐ろしくつり上がった、

「なんだとう？ 江戸っ子だ？ふざけんじゃねえや！」

「ひっ」

「おうおうおう、からくり師をなめんじゃねえ！」

「いえ、けっしてそんなつもりは・・・」

「からくり師なんてのは、根気がいる仕事なんだ。気が短くって腹の据わらねえ江戸っ子なんかにはできると思っているのか。こちとら、代々この村に住んでる生粋の村っ子だ。気が長くて穏やかでおっとりしてんだい！ 勘違いしてるよ、土手っ腹に穴開けてお寺作って婆さん集めてお経読ませるから、そう思え！」

「いえ、話し方が江戸っ子っぽいかなど・・・」

「知らねえや、死んだ親父がこういう風に話してたんだ。悪いか。おう、ねえちゃん、こちとら村っ子でえ。気が長えんだ。」

おっとりしてんだ。ふざけたことぬかすと、頭と足持って、なわとびの代わりにして二重跳び五百回やってやるから、覚悟しろい！」

「ちっとも、おっとりしてないじゃないですか！」

「おっとりしてねえ？ こいつ、俺は自分のおっとりさ加減

を否定されるのが一番頭に来るんだ。どれだけ、俺が大人しいか目にも見せてやる！」

と源太夫は、床の間に飾ってあった日本刀に手をかけました。

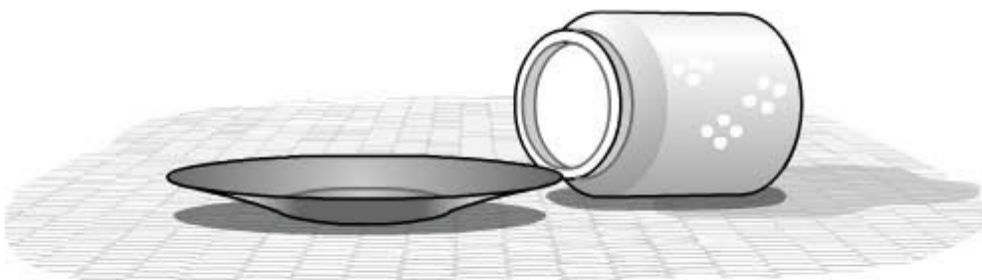


「あぶない！ ハムー！」

と、ろろんが叫ぶと、ハムーが座敷に乗り込んできました。

「ハムー、源太夫さんとちよっとお散歩してこい！ 暴走モードでな」
ハムーは源太夫の襟首をつかんで、背中に乗つけると、爆音を上げて走り去りました。しばらく、座敷の中にはつむじ風が巻き上がっていました。

（インターミッション・・・源太夫がいなくなっちゃったので休憩とします。トイレに行きたい人はこの間に行つてきてください）



しばらくして、再び源太夫は下がり眉になつて戻つてきました。作務衣はあちこち破れ、顔には擦り傷ひつかき傷ができ、頭に蜘蛛の巣と植物のつるや葉っぱが引つかかっています。だいたい、どんな目にあつてきたか想像はつこうというものです。

「いやあ、悪かった。悪かった。ちよつとだけ、短気になつちやつたかな」

「どこまで行つたんですか」

「うーん、わからなけれど、なんか川のほとりで、向こう岸に死んだ親父やお袋がいて手招きしていたなあ」

「三途の川じゃないですか。よく戻つて来れましたね」

「面目ねえ。ま、忘れてくんな・・・まあ、今日はからくりの話を聞きにきたんだろ？ ゆつくりしていつてくんねえ。村にも分教場にも世話になつてるしな」

「今、分教場では、幸太君が地蔵堂を作つているんですよ」

「おう、あいつ、なにか分教場で用があるとか言つて、この頃帰りが遅いが、そういうわけだったのかい。しかし、地蔵堂・・・どこのお地蔵さんだい」

「旧往還に建つている面白いお地蔵さんですよ」

（旧往還というのは、いま地蔵が立つている道のことです）

「旧往還？・・・あの道に、そんなのあつたつけなあ・・・あつちの方は、滅多に行かないから・・・」

「地蔵・・・あいつ、とことん人気がないんだなあ」

と、文豪先生がため息をつきました。すると、ろんろんが、

「じゃあ、源太夫さんに地蔵を見せてやろう。ハムー！」

源太夫の顔がこわばつて、あとずさりします。

「また、あのでっかいネズミに乗つていくのかいい？ い、いいよ、いいよ。こんど行つたら、死んだ親父とお袋に羽交い締めにされて、三途の川の向こうに連れて行かれるような気がするから」

「心配するな。地藏の方をここへ連れてくればいい。行くぞ、ハムー」
ろんろんは、ハムーの背にひらりと飛び乗ります。

「ごー！」
また、爆音を上げて、ハムーの姿は見えなくなりました。

残ったこちらは、からくりを見せてもらおうことにしました。家の裏手に、体育館のような建物があつて、そこが工房だということです。

「大きい工房ですね。祭りの山車に乗せたりするからくり人形ですか？」
と工房に向かって歩きながら、民子が聞きました。

「いろいろだ。まずは、ゆつくり見てくれよ。おいら村っ子だ。せわしねえのは性にあわねえ」

村っ子と聞いて民子はびくつとしましたが、源太夫は穏やかなままでした。

工房は小さな工場を思わせるがらんとしたつくりでしたが、中に青森のねぶた祭りの人形を思わせるような大きな細工物が何体かありました。

七つ道具を背負った赤ら顔の弁慶の姿をした大きな人形の前に来ました。三メートルはあろうかと思われます。

「まずは、動かしてみらあ。ねえちゃん、その前にある座布団に座ってくんねえ」

見ると、弁慶の前に四角い台があつて、その上にあひるの柄の座布団があります。民子は言われたとおり、台に上がって座布団の上に正座しました。

源太夫が弁慶の後ろに回ってゼンマイのネジを巻きます。すると、からからからと乾いた音がして、弁慶の眉がびくびくと動き、眼をぎよろつと剥きました。

「ひえっ」

思わず民子が声を上げます。源太夫は、民子を見てうれしそうに、

「さて、まずは、ねえちゃんを歓迎する舞を舞ってご覧に入れよう」

弁慶が背中の中の七つ道具から、薙刀を取り出しました。そして、びゅうびゅうと振り回します。さらに、足を上げ身体を回転させ見得を切ります。民子の顔にびゅんびゅん風が当たってきます。

「あの、これ危なくないですか」

「けけけけ、こわい？ねえ、こわい？」

「こわいですよお」

文豪先生も呆れたように、

「これ、全部ゼンマイ仕掛けで動いているのか？」

「おうよ。材料も木とか竹とか紙とか布とか、昔から日本にあるものだけよ」

「こんな複雑な動きが出来るものか」

「そこが杉本家十一代の秘伝だったのよ。さ、驚くのはこれからだ」

「もう十分に驚いてますよお」と民子、泣き声を出します。

弁慶は、舞を終わって薙刀を背中に戻すと、こんどは右手を懐に入れました。なにかを捜しているようです。なかなか、見つからないようで困った顔になりました。

「あの表情もからくり仕掛けなのか」

「ふひひひひ、すげえだろ」

あつた！ という明るい表情になり、ふところから手を出すと、持っていたのは、あひるの絵を描いたがま口でした。開けてみると、五円しか入っていません。

がっかりした顔でかぶりを振った弁慶は、元に戻すと、また、ごそごそやって、やがてニッコリ笑いました。

「見つかったようだな」

そして、右手をふところのままに、大きな左手で民子の頭をがっしりと上から押さえました。

「ひいつ。殺される・・・」

ふところから出した右手に持っていたのは、耳かきでした。その耳かきを、民子の耳に入れると、かさこそと掃除を始めました。

「ふやあ・・・あ、あれ、気持ちいい・・・」

「一体この人形はなんなのだ」と文豪先生。

「見てのとおり、耳そうじ人形でえ」

「なんで、こんな大げさにやらなきやいかんのだ」

「大きい動きと繊細な動きを両立させるのが、テーマなんでえ」

反対側の耳も掃除して、耳かきの先をふっと吹くと、ふところにしまい再びニッコリとしました。

「よく見ると、愛嬌があるな」

「さあ、これからフィニッシュでえ」

弁慶は、薙刀を再び取り出すと、また振り回して舞を始めました。

「今度はなんなのだ」

「耳そうじが成功したという喜びをあわらす舞さ」

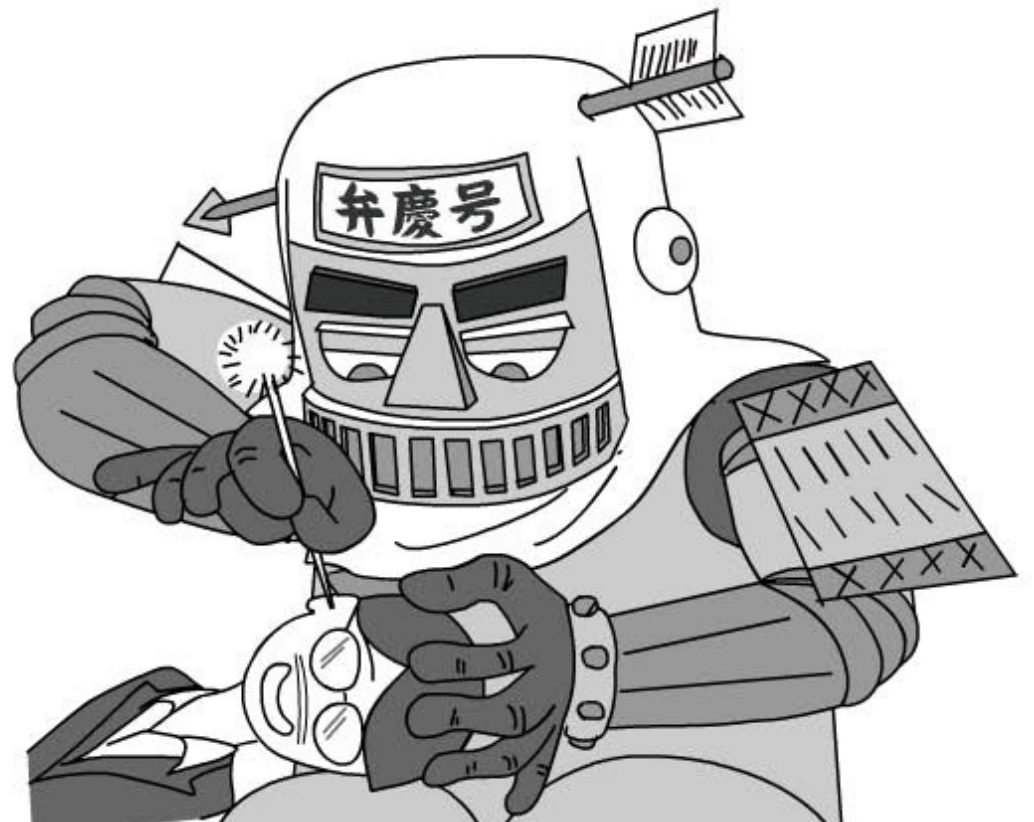
「失敗することもあるのか」

そのうち、薙刀の柄がぼこつと民子の頭をひっぱたきました。民子は「ぎゃつ」と言っ

て台から転げ落ちました。

「やったー」と源太夫。

「だ、大丈夫か」と文豪先生。
「だいじょうぶ、だいじょうぶ・・・柔らかい素材で作ってあるって」



「ということは、あんた、初めからぶつけるつもりで作ったのか」
「最後に笑いを取らなきゃいけねえと思って」
「よけいなことを・・・」

「大丈夫か」と先生が民子を気遣います。

「なんのこれしき」

と、民子は頭をさすりながら、

「わたし、だんだん不幸に強い女になってきました」

そこへ、源太夫の声が掛かります。

「おう、今度は文士の先生、あんた、こっちの座布団に座ってくんねえ」

「いや、私はいよいよ・・・」

「なんだと？ おい、せっかくからくりを見せてやろうつてのに・・・おう、こちとら村っ子でええ！ 気が長えんだ、おだやかなんだ、おっとりしてんだ！ 大人しく言ってる間に、座りなよ！ 耳の穴に薙刀ぶっ込むぞ！」

文豪先生、言われたところに渋々座りますと、だいぶ離れたところに、サムライの人形が立っていて、片手に刀、片手に舟の櫂を持っています。

「いやな予感がするなあ。あれはなんなんだい」

「見てわからねえか。宮本武蔵だよ。これだから、零点の文士は困るってんだ」

「なにもここで、零点を持ち出さなくても・・・」

「おう、先生、あの人形に向かって『武蔵、遅かったぞ』と言ってくんな」

「というと、私は佐々木小次郎か」

「その声に反応して動くんだよ」

「小次郎って斬られる役じゃないのか」

「うるせえ！ この三文文士、こちとら村っ子でええ！ 気が長えんだ、おっとりしてんだ！」

斬り殺されたきや、俺が斬り殺してやらあ！」

「わかったよ・・・こんな村っ子、あんだだけだぞ。じゃあ・・・武蔵、遅かったぞ！」
すると、からりからりからと音がして、武蔵がこちらを睨みつけます。

「ゴジロウ、ヤブレタリ・・・」

「しゃ、しゃべった・・・」

ぎり、ぎり、と一歩、二歩とこちらに歩き出します。次の瞬間、だつ、と走り出しました。

「うわ、あぶない・・・」

そして、先生の数メートル前で、たん、と跳躍します。權を振り上げたその姿に、
「こ、殺される・・・」

思わず目をつぶる・・・脳天に一撃が・・・来るか、と思うといつまでも来ません。恐る恐る目を開けてみると、武蔵は自分の前に片膝立てて座っていました。手には、いつのまにか、小さな椀と卵があります。

武蔵は、卵を椀の縁にこんこんとぶつけて中に割り入れます。そして、しょう油をちゅつと垂らして、ふところから箸を出してかき混ぜます。次に（なぜか）横にあった炊飯ジャーからご飯を茶碗によそい、卵をかけて先生に渡します。

「なんなんだ、これは」と先生は食べながら聞きます。

「ご覧の通り、卵かけご飯人形だ」

「なんで、こんな手の込んだことをするんだ」

「俺は、子供の頃から卵かけご飯が好きでなあ。もつと、おいしく楽しく食べられないかと追求しているうちに、ここに辿り着いたのだが、どうだ？」

「普通に食べた方が・・・」

「うーむ。ここは、やはり武蔵人形より、あひる人形がよかったかな」

その時、文豪先生の目が鋭く光ります。

「十一代目・杉本源太夫、貴様の秘密を見破ったぞ……」

「な、なに？」

「貴様、異常なあひる好き、マニアだろう」

「ど、どうしてそれを」

「知れたこと、この家は、あちこちあひるだらけだ。泉水、掛け軸はもちろん、鬼瓦の代わりにあひる瓦、水道の蛇口にあひる、ドアのノブにあひる、座布団に茶碗にあひる……」

「ふふふ、さすが山田文豪、よくぞ見破ったな……」

二人は、不敵に笑ってにらみ合っています。武蔵と小次郎の対決もかくやと思われる雰囲気です。

「あの一、そこまで緊迫感をかもし出さなくても」と民子が口を挟みます。

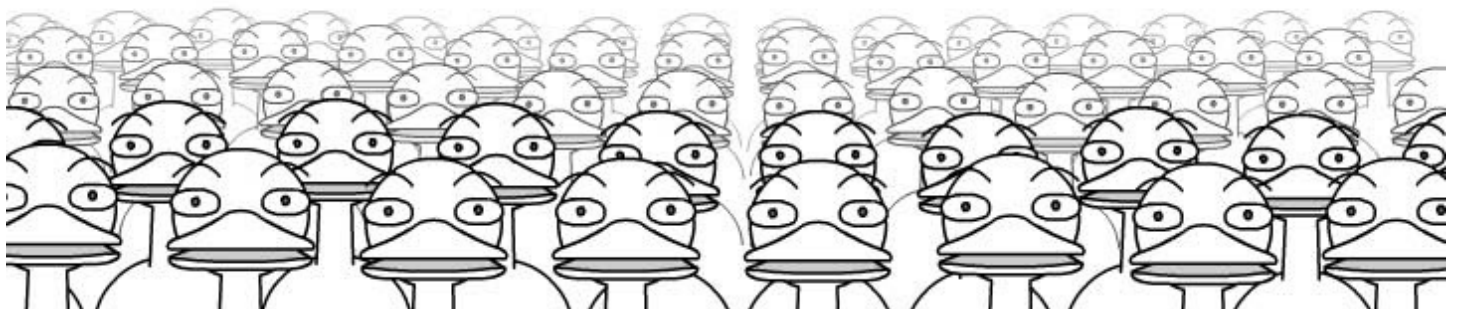
「だまらっしゃい！こうまで言われては、これを出すしかあるまい。見るがいい、からくりによるあひる大行進！」

源太夫が、壁のボタンを押すと工房の奥に引かれていたカーテンがすつと開き、その向こうには何千羽いるかわからない大量のあひるの人形が整然と並んでいます。みな、どこを見ているかわからないうつろな表情、いやに目から離れた眉毛という同じ顔をしています。なぜか足は、人間のような足になっています。

天井に設けられたスピーカーからマーチングドラムの音が流れ始め、何千というあひるが一齐にこちらに向かって、ぎざぎざと歩き始めます。「ぐわっぐわっぐわっぐわっ」というあひるの鳴き声が工房内にこだまします。

その時、別の方角から大きな声が聞こえました。

「見届けたぞ！ 十一代目杉本源太夫、からくりの奥義！」



声の方を見ると、工房の入り口に地蔵が、ろんろんとハムーを控えて立っていました。

「この父の神業を見れば、息子・幸太に引き継がれたDNAがわかるとういうもの。これで作戦コード『スナフキンがタミーに近づいたらゆるしまへんでスベシャル』は成就したも同然！」

ところが、それを見た源太夫はその言葉がまるで耳に入っていないかのように、目を輝かせて地蔵に飛びつき、こんこんと頭を叩いたり、なでまわしたりしています。

「な、なにをする」

「石だ。本当に石だ。で、なに、石がしゃべっているの？」

ね、どういうからくり？ わ、目も動く、怒って顔が赤くなっている・・・えー？ どういう仕組み？ 動力は？ ね、ね、これ解体していい？」

と、ろんろんに聞きます。

「いいぞ」

「だめー！」

と地蔵、

「本人の承諾を得なきゃだめー！」

「じゃ、本人、承諾して。解体させて。壊させて」

「いいわけないだろ！」

「承諾してー！ 解体したーい！ 中身見たーい」

「俺はからくりじゃなーい！」

こんどは工房の中から文豪先生が、



「おい、源太夫、このあひる何とかしろ！」

見ると、あひるがあとからあとから出てきて、二重三重四重五重に重なり合い、あひるの海ができています。それでも、まだ、あひるはあとからあとから出てきます。

「いったい、どこにこんな大量のあひる隠していたんだ！」

「ふふふ、地下に秘密格納庫があって、そこに・・・うわ！」

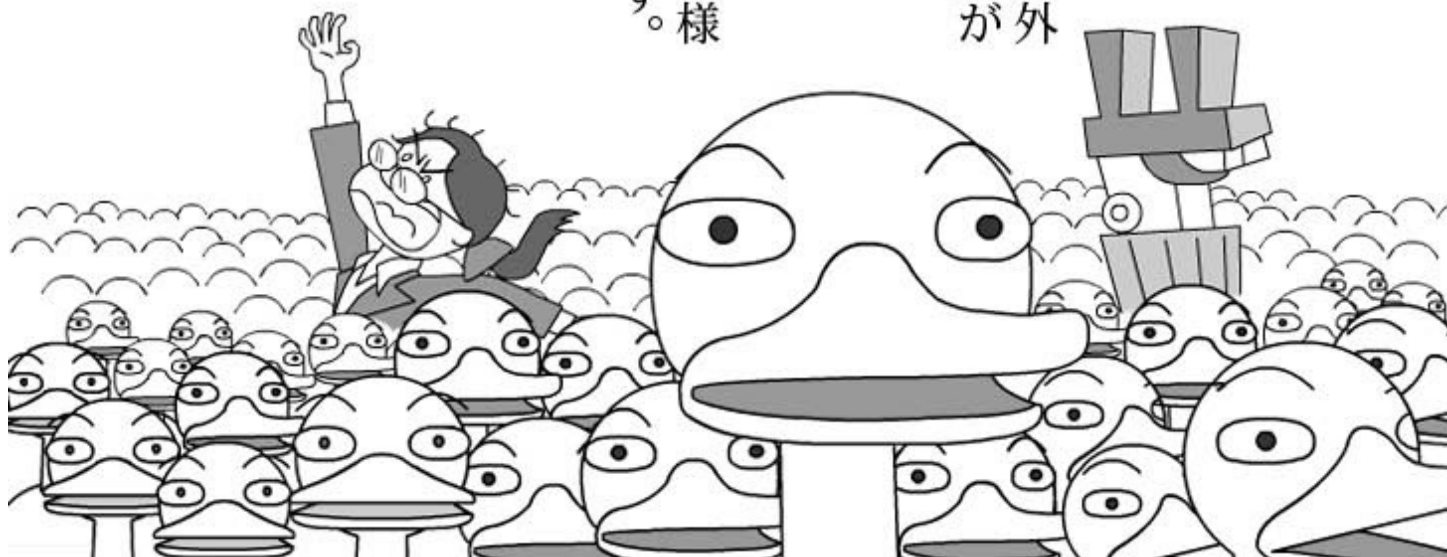
あひるの海は、ついに源太夫や地蔵を襲い、さらには工房の外へと流れ出していきます。工房のうちでは、弁慶や武蔵の人形がすでにあひるの波に飲み込まれ、あひるの底に沈んでいます。

「先生ー！ おぼれるー！」 民子が悲鳴を上げます。

「民子くーん、がんばれー！ 救助を待つんだー！」

果たして救助なんて来るんでしょうか。にわかには冒険活劇の様相を呈してまいりましたが、明日はどっちだ？ 次回に続きます。

(つづく)



文豪先生 第八話

<http://p.booklog.jp/book/56936>

著者：中川善史

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/56936>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/56936>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ